

荒木 和憲（日本史学）

## 中世対馬宗氏領国と朝鮮

本論文は、中世の日本と朝鮮の関係（日朝関係）について、その交流の中心にあった対馬宗氏を基軸として検討を加えたものである。中世日朝関係史研究において、対馬宗氏に言及しない研究はほとんどないが、本論文は、宗氏の領国形成と対朝鮮関係を有機的な連関の中で捉えた点に大きな特色がある。さらに、従来の日朝関係史研究では、『朝鮮王朝実録』等の朝鮮側史料のみに依拠した研究が主流であったが、本論文では、対馬の中世文書を博搜し、朝鮮側史料との総合のもとに検討がなされている。

第一部では、十五世紀代の宗氏の政治的動向と朝鮮通交の関係について検討している。第一章では、室町初期の対馬島主宗貞茂の政治的動向と朝鮮通交の関係について検討し、貞茂の朝鮮通交は、領国経営の一環としてなされたもので、一四一〇年代に外交主体から貿易主体に変化したことを明らかにした。

第二章では、宗貞盛の政治的動向と朝鮮通交の関係について検討している。宗貞盛の朝鮮通交は、外交を主体とするものと貿易を主体とするものがあったが、一四四三年の癸亥約条の成立によって、前者は特送船に、後者は島主歳遣船に変化したことを明らかにした。

第三章では、癸亥約条で認められた対馬島主の特送船について検討している。島主特送船の構成員を明確にし、時代を下るにつれて特送船の商船化、求請船化が進行することを明らかにした。中世日朝関係において重要な役割を果たした特送船に関して本格的に検討した初めての研究であり、研究史的にも注目すべきものがある。

第二部では、十五世紀から十六世紀代の宗氏権力の動向と朝鮮貿易権の関係について検討している。第一章では、十五世紀前半の宗貞茂・貞盛期の宗氏権力の確立過程と朝鮮通交権の管理体制について検討している。宗貞盛期に宗氏権力が安定化し、一四二〇年代～三〇年代に朝鮮貿易権の宗氏による独占化が図られ、一四四〇年代～六〇年代に朝鮮通交権管理体制が確立していったことを明らかにした。

第二章では、十六世紀前半の対馬島内の政変と一五一〇年の三浦の乱について検討している。島主宗盛長は、対朝鮮外交の局面打開に失敗し、政権内部の守護代・直臣層と対立した結果、宗盛賢のクーデターにより失脚したことを明らかにした。

第三章では、十六世紀代における宗氏権力の変容と朝鮮通交権の関係について検討している。一五一二年の壬申約条における朝鮮通交権益の激減によって、宗氏の家臣団統制は円滑に進行しなくなった。このため宗氏は、偽受職権益・偽使通交権益を大量に獲得し、宗氏一門・家臣に広く分配することで危機を乗り切り、島主の権威を回復させたことを明らかにした。

第四章では、対馬の朝鮮貿易と領国経済の関係について検討している。十四世紀末に宗貞茂が対馬中部の佐賀に本拠地を移した後、佐賀は朝鮮貿易のための港湾都市として発展し、佐賀経済圏というべき地域経済圏の中心地となったこと、十五世紀後半に守護所が府中に移された後も、依然として佐賀経済圏の機能が維持されていたことを明らかにした。以上の研究は、中世日朝関係の推移と構造を対馬宗氏を基軸にして分析した意欲的かつ重要な研究であるといえる。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。